関西大学学術リポジトリ
Kansai University Institutional Repository

『史泉』という目標

著者	鵜飼 昌男
雑誌名	史泉
巻	100
ページ	15-15
発行年	2005-01-31
URL	http://hdl.handle.net/10112/00024936

『史泉』という目標

鵜飼　昌男

学部を卒業して修士課程に進み、本格的に漢簡を学ぶようになった三年目の秋、修論の目途が立ち始めた頃、初めて学術雑誌というものを身近に意識した。それが『史泉』であった。当時の私は漢簡を史料として利用するためには、書式による集成分類作業が必須であるというご指導を受けて、コツコツ一簡一簡写真と釈文を見比べて分類し、居延漢簡の簿籍の集成を試みていた。断簡零墨の山の中でも不思議と倦まず、マイクル=ローウェー博士や京都大学の永田英正先生の遺を一つでも拾えれば上出来。何もでなくとも居延漢簡の全体像が頭に入るからよいと、楽しみながら一次資料の山に分け入っていったと思う。

ところが、数枚の文書逓伝の記録簡がその遅延を咎める文書と共に一つの冊書になるのではないかと考えはじめると、この成果を引っさげて初めて関大から外の世界に腕試しをしてみたくなった。上部が1㎝ほど欠けている一枚の簡と一致する断片を、集成データから見当をつけてピックアップできた時には、爽快でさえあった。そして翌日、挑むようなつもりで文学部長室に大庭脩先生をお訪ねした。先生の温厚な表情は眼鏡を取り出すや一変し、厳しい眼差しでレジュメと写真を検討された。長く感じられたが実際は十五分ほどであったか、眼鏡をはずされて例のニヤッ。「こりゃあワインで乾杯もんやな」「できるだけ早く発表しろ。『史泉』の最新号に間に合うかどうか調べろ。」「こういう時に自前で雑誌を持っている大学というものは有難いものだぞ。」と言われた。大庭先生の喜んでおられる姿と論文というものを初めて発表するのだという気合いを胸に、『史泉』の裏表紙にある執筆要領を読みながら法文坂を帰ったことを覚えている。

讀史会という院生主催の東洋史学部生との勉強会立ち上げの頃、院生は修論を史学・地理学会か関大の東洋史研究会で発表する。そして『史泉』に掲載できるよう頑張れと、松浦先生から院生のノルマを説かれたが、『史泉』の存在を考える時、院生がデビューするこの道筋は今でも関大東洋史のスタンダードであると思う。

（昭和五十六年三月卒　東洋史）